

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2912号	氏名	古場 朗洋
審査担当者	主査	山本 宏一	(印)
	副主査	志波 通人	(印)
	副主査	清川 兼輔	(印)
主論文題目： The Usefulness of Piezoelectric Surgery in Sagittal Split Ramus Osteotomy (下顎枝矢状分割術におけるピエゾサージェリーの有用性)			

審査結果の要旨 (意見)

本研究は、下顎枝矢状分割術の主な合併症である下歯槽神経麻痺の発生に対して piezosurgery の有効性を明らかにしたものであり、学位論文としてふさわしい研究と考える。

論文要旨

下顎骨骨切り術は血管、神経に損傷を与える危険をとまなう。Piezosurgery[®] は超音波振動を使う切削器具であり、周囲の軟組織への損傷を少なくし骨を選択的に削合する。今回、Piezosurgery[®] を用いての両側下顎骨枝矢状分割術において周囲の軟部組織の影響について検討した。対象は44人の骨格性下顎前突症の患者で、チゼルを用いた群とPiezosurgery[®] を用いた群に分け、骨切り時間、出血量、知覚異常の発生率をretrospectiveに比較した。Piezosurgery[®] を用いた群では骨切り時間と出血量は、チゼルを用いた群と比較して有意差をもって減少していた。手術直後の知覚異常発生率は両群間で有意差が無かったのに対して、Piezosurgery[®] を用いた群では術後3ヶ月後の知覚異常はチゼルを用いた群と比較して有意差をもって減少していた。しかしながらPiezosurgery[®] を用いた群においても知覚異常が回復しなかった症例もあり、失血量と骨切り時間は、知覚異常に関して相関性はなかった。この論文では Piezosurgery[®] を用いる事で軟組織に与える影響を軽減できるが、下顎枝矢状分割術では硬組織、血管、神経が複雑に存在し、必ずしも軟組織に影響しない訳ではない。しかしPiezosurgery[®] を用いる事によってチゼルを使用した手術と比較して長期的な知覚異常を減少させる事ができる事を提唱した。